

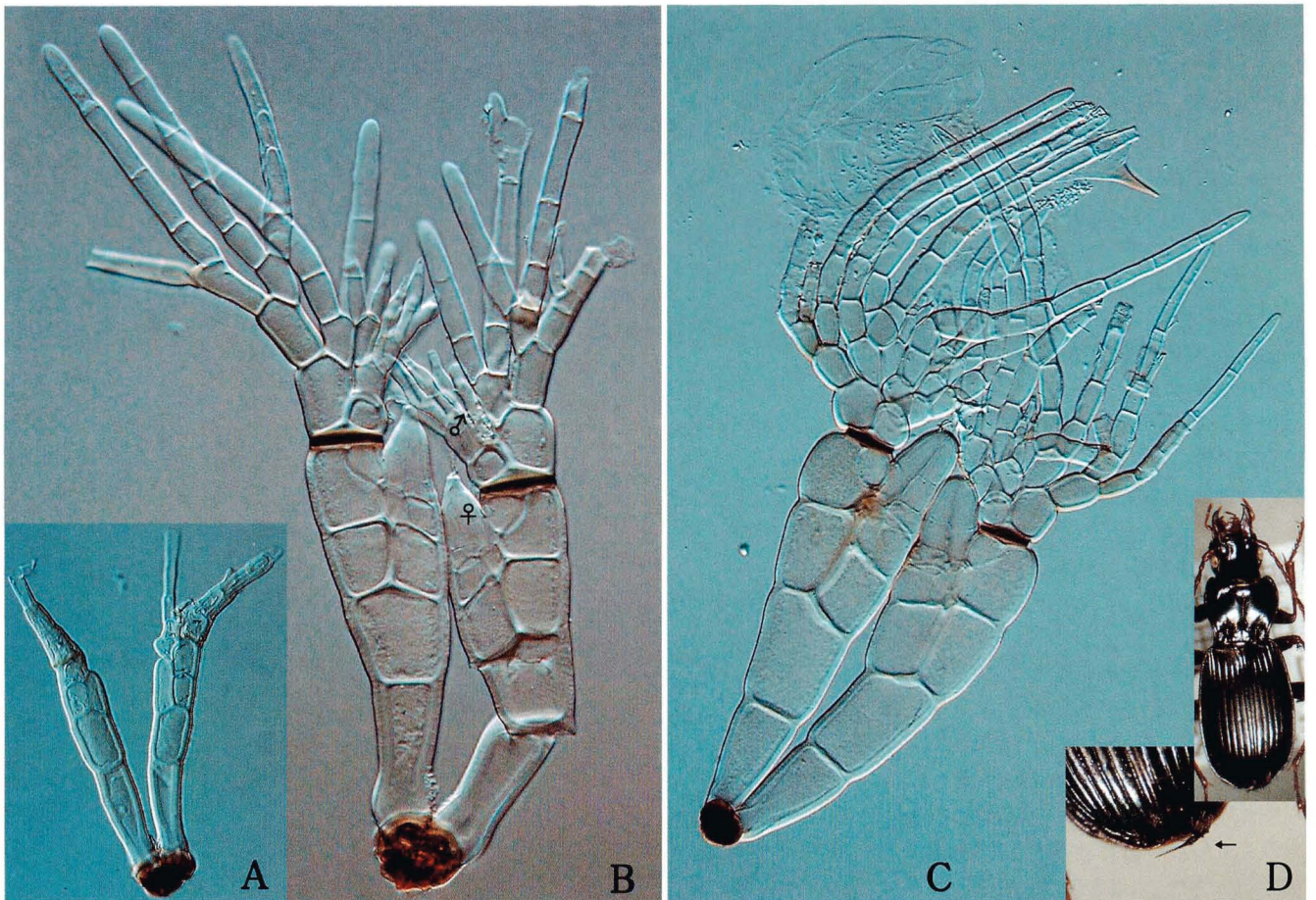
# 自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 9, No.1

神奈川県立 生命の星・地球博物館

Mar., 2003



## ラブルベニア属(カビ)の一種 —昆虫体表に生きる究極の菌類—

*Laboulbenia* sp. (子囊菌門)

A 若い菌体, B 造精器(♂)と造囊器(♀)を生じた菌体, C 成熟途上の菌体, いずれも2002年3月, イソヒヨドリ糞中のゴミムシ科昆虫断片上に付着(A-C: 微分干渉顕微鏡写真), D ナガゴミムシ属標本の翅端についていた菌体(矢印), 長さ約1mm(実体顕微鏡写真)。

出川洋介 (学芸員)

ラブルベニアは、生きた昆虫の体表で一を送る、虫の毛ほどのマイクロサイズの菌類です。その大きさと形から、ある昆虫コレクターは、標本についてのゴミだと思っていたとのこと。

胞子は粘着性で、虫同士の接触により別の宿主個体に感染します。そして基脚部(写真中、菌体の付け根の黒色化した部分)を通じて、クチクラなどからごく微量の栄養を吸収して生活します。徹底的に体を切り詰め、決まった順序で細胞分裂を行い雌雄の器官

を生じると、不動精子の受精によって成熟して再び胞子を形成します。

現在、世界から141属1869種、日本からはその約一割が知られ、特にゴミムシやハネカクシ類の体表に高頻度に見られます。ラブルベニア目の菌は、甲虫以外にも、ケラ、ゴキブリ、ハエなど10目もの昆虫、さらにはダニやヤスデ類からも知られています。いずれも宿主に対して強い種特異性があるため、宿主の種数に匹敵するさらなる未知種がいるかもしれません。